

ぶどう「紅伊豆」の収量構成要素

(園試大迫試験地)

1. 背景とねらい

準奨励品種に昭和62年から編入している「紅伊豆」は、徐々に栽培面積が拡大されており、その評価も高まってきているが、収量を構成する要素については、他県での研究事例も少なく、明らかでない点があった。

そこで、「紅伊豆」の収量構成要素について検討した結果、以下の知見が得られた。

2. 技術の内容

- 1) 紅伊豆の平均新梢長は、150cm（葉枚数23枚）程度が適当である。100cm以下では、登熟率が低下し、結果母枝として利用できない新梢が多くなる。200cm以上では、新梢の停止期が8月上旬以降となるため、養分の浪費となる。
- 2) 紅伊豆の成葉1枚当たりの着果負担量は、12g程度が適当である。これ以下では、果実品質は良好となるが、収量が低くなる。また、これ以上では、収量は高くなるが、着色不良、低糖度、高酸度となり、果実品質が低下する。
- 3) 紅伊豆の葉面積指数(LAI)は、2.0程度が適当である。1.5以下では、糖度は高く、酸度は低く、着色も良くなるが収量が劣る。2.5以上では収量は高くなるが、糖度が低く、酸度が高く、果粒肥大も劣る。また、透光率が18.0%と過繁茂状態となる。
- 4) 以上から紅伊豆の収量構成要素は下表の通りとなる。

LAI	平均 新梢長 (cm)	1葉当 たり着 果負担 量(g)	10a当たり		3.3m ² 当たり			1新梢当 たり着果 量 (g)	1葉当た り粒数 (粒/葉)	10a当た り収量 (kg)
			新梢数 (本)	葉枚数 (枚)	新梢数 (本)	葉枚数 (枚)	着果量 (g)			
2.0	150	12	4.500	100.000	15	333	4.000	270	0.9~1.1	1.200

5) 適応地域 県中南部（紅伊豆栽培地帯）

6) 適応仕立法 平棚長梢仕立

3. 指導上の留意事項

- 1) 平均新梢長が150cm程度となるように、芽かき、施肥、剪定などの管理を適正に行う。200cm以上伸びる新梢は、200cm（葉枚数29枚）程度のところで摘心する。
- 2) 1粒重は12gが標準であるが、気象条件や栽培条件等によって変動するので、1葉当たりの粒数は、果実肥大の状況により加減する。

4. 試験成績の概要

第1表 8月上旬までの新梢停止率(平成5~8年)

新梢長	8/5日までの新梢停止率(%)
75cm以下	100.0
76~125cm	100.0
126~175cm	96.7
176~225cm	70.6
226cm以上	12.9

第2表 枝の登熟割合(平成8年)

新梢長	登熟割合(%)
75cm以下	15.5
76~125cm	43.9
126~175cm	65.9
176~225cm	77.5
226cm以上	82.1

第3表 収量と果実品質 (平成8年)

試験区	収量	房重	1粒重	糖度	酸度	1葉当たり着果
	(Kg/10a)	(g)	(g)	(Brix%)	(g/100ml)	負担量(g)
10g/成葉1枚	975	303.4	10.2	17.0	0.52	10.2
12g/成葉1枚	1,119	325.7	9.3	17.0	0.52	11.6
14g/成葉1枚	1,330	316.7	9.3	16.3	0.54	14.0

注)試験区の設定8月5日。収穫日、調査日は10月1日。葉面積指数を2.0に設定。

第4表 着色程度別果房数割合 (平成8年)

試験区	果色 (C.C.No.)						注)日本園芸植物色表 使用。測定部位は 果実中央部。
	薄← 赤色 →濃						
	0405	0406	0407	0408	0409	0410	
10g/成葉1葉	0.0	3.6	14.3	57.1	25.0	0.0	
12g/成葉1葉	0.0	2.9	25.7	40.0	25.7	5.7	
14g/成葉1葉	2.6	10.3	34.6	42.3	7.7	2.6	

第5表 収量と果実品質 (平成8年)

試験区	収量	房重	1粒重	糖度	酸度
	(Kg/10a)	(g)	(g)	(Brix%)	(g/100ml)
LAI 1.5	825	296.2	9.2	17.8	0.49
LAI 2.0	1,119	325.7	9.3	17.0	0.52
LAI 2.5	1,368	315.7	9.1	16.9	0.53

第6表 透光率 (平成8年)

試験区	透光率
	(%)
LAI 1.5	48.8
LAI 2.0	33.3
LAI 2.5	18.0

注)試験区の設定8月5日。収穫日、調査日は10月1日。

1葉当たり着果負担量を12gに設定。